

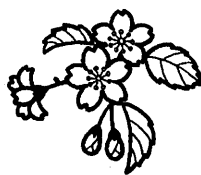
ひまわりからの メッセージ

48号

2016. 3. 10

西濃園 域
花達陣がい支援セタ
ひまわり

発行人: 中野たみ子



春三月

やわらかな光の中で

先日、旅仲間の同窓会があつて、伊豆の河津桜を見に行ってきました。大島桜と緋寒桜が自然に交配してきたということ、染井吉野よりもピンクの色が濃くて遠くから見ると紅梅のようでした。木の下には菜の花も咲きはこり、一足早く春の息吹を感じてきました。

帰宅して、ふと見ると庭先ではクリスマスローズの花茎がいつのまにか伸びており、すみれが濃い紫の小さな花を咲かせていました。季の過ぎゆくを感じ、思わす坐りこんで莖に見入ってしまいました。華やかな花よりも野の花や地味な花に心惹かれる自分に改めて気づかせ

れたことでした。

山路きて何やらゆかしすみれ草

すみれの花を見ていた。上石津で見かけた芭蕉の句碑が心に浮かびました。この句は、芭蕉の「野ざらし紀行」の中の有名な句です。すみれは山ではなく野にあるもので、この句はいいのかどうかといった論争があったと知りましたが、芭蕉は、山路を来たからこそ心惹かれたのでしょう。

ところで、最近、年令のせいなのか、自己主張の激しい人や、他人をさげすむような態度をとる人に怒りよりも、より憐れみを感じるようになりました。けれども、さて自分はどうでしょうか。他人から見ると、私ものはもうならぬ人間に見えるのかもしれない。

子どもたちのきらきら輝く瞳に、恥じない大人でありたいと常々思いつつ、又、年度末を迎えます。

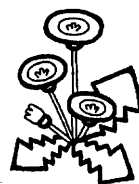
春三月、別れの季節です。でも新たな出会いと新たな出発が目の前に待っています。希望をもって一步を踏み出しましょう。



子どもたちの発達大丈夫？

— 乳幼児期からの見直し —

① 赤ちゃん時代



先日、ある保育士さんが「オッパイを飲ませる時に、抱いて与えようとすると飲まないんです。ベットの寝かせたままだと飲むんですが、きつと家でもそうなんです」と嘆いていました。エッと思いませんか？ 何十年前、施設入所の赤ちゃんが抱いてオッパイを与えられないことが問題になりました。赤ちゃんに信頼できる大人（主に母親）との愛着関係が育たないことが、後の心の問題につながるのはないかと心配されたからでした。

今、赤ちゃんは核家族の中で育つことが多くなりました。子どもは放っておいても自然に育つものだと考えている若いママも少なくないようですが、実は、子どもたちは、周りからの様々な刺激（ことばかけ、あそび、生活の自立に向けた働きかけなど）を上手に取り込

みながら育っていくのです。ところが、赤ちゃんが目覚めていても、ママがテレビやスマホに夢中だったり、きちんと赤ちゃんに向き合って話しかけてくれなかったりということが日常的にあると、赤ちゃんは必要な刺激を与えられません。赤ちゃんの発達は、最初は快・不快という感覚から始まりますが、オッパイをもらう、ママに抱かれる、やさしいことばをかけてもらう、おむつを換えてもらうというスタートさえも、今はあやうい時代になつてきているのではないのでしょうか。

つい先日、赤ちゃんが首もすわっていないのに動かすことを奨励して死亡させてしまったNPOの理事長が逮捕されましたが、若いママたちの無知が、こうした事件を引き起こしたとも考えられます。「ことばって、相手はしゃべらないのに、どうやって話せばいいんですか？」と質問されますが、「いい子ね」「おむつ換えようね」「ママ大好きい」など何でも良いのです。ママの肉声をかけてもらうことが大事なのに、スマホのアプリでは、人と人とのかわりの大切な部分が育たないことになります。

赤ちゃん時代、おしゃべりしなくても、耳で聞き、目で

見、口で確かめながら、大人とのかかわりを楽しみ、やがて自分の方から大人や物にかかわろうとしていきます。脳の可塑性が高く、様々なことを吸収していく赤ちゃん時代は、本当に大事な時間なのです。

② 幼児期



赤ちゃんが歩くようになってくると、ことはも出はじめます。ことは発達の度合がよく分かるので、健診でもよく使われますが、発語には、多くの要素が必要です。食事を通して舌や口などがうまく協調して動くこと、音の違いを聞き分ける耳の働き、ことはの理解、人と人との関わりなど様々な要素が関係しています。友だちとのトラブルは、たいていの場合、上手に口で言えないために起きるのですが、表現する力の多くは、家庭の中でのことばのやりとりが大きく起因すると言われます。忙しい毎日だけれど、私たち大人が、ことはを豊かに使えるようにしたいですね。

生活面のこととは、どうでしょうか。よくお母さん同士の会話の中で、「おむつも保育園でとってもらえばいい」ということや、「お着も使えるようにしてもらった」と

いった会話も聞かれるとのこと。子どもにとっての生活習慣の自立は、感覚を育てることでもあり、自分の体のイメージを作ることでもあり、協調動作（例えば左右別々の動き）を獲得していくことでもあります。この幼児期の土台がしっかりしていないと、小学校で困るのは子どもたちでしょう。

ところで、最近、子どもたちの中に、自分の気持ちに折りあいをつけることができない子が多くなりました。実は、「うだけれどもうする」という力は四歳半ではでききているはずなのです。「ゲームがもっとやりたい。でも晩ご飯だからやめる」とか、「ぼくは、それは好きなことではないからやりたくない。でもクラスの皆がやるから、ぼくもがんばる」というような気持ちの切りかえは、ぜひ家庭でつちかって下さい。「うちでは問題ないんです」と言われる家庭にかぎって、ゲームがやり放題だったり、物事が子どもを中心に動いているきらいがあります。まず、家庭のルールを作ることです。子どもの気持ちや要求は受け止め、でも、今はできないということとを教えていくことが家庭の大事な役割なのです。

③ 就学も前に

スマイルブックをもっていき子引きつぎの会が行われています。「支援の引きつぎ」と言っているも、ついつい「要望の場」になっていることもあります。

・ 園と学校との違いは何なのか、

・ 学校にお願ひできることとできないこと、

・ 家庭でできること、やるべきこと、 等々、私達も今

一度考えてみましょう。通常学級へ行く子の中で「一斉の指示ではわからないので、もう一回個別的に声かけをして下さい」という要望がよく出てきます。「園では、そうしてきました」と園の先生は言われますが、

日々新しい課題を学んでいく学校の場合、「〇〇さん、聞いててね」「〇〇さん」と声をかけることが本当に可能かどうか……、それよりも、全員に注意喚起をして授業を進めていくことの方が現実的です。

では、一斉指示は聞かない子の場合、家庭ではどうでしょうか、人の話をしっかり聞くという態度づくりは家族との会話や、お手伝いの依頼などで工夫していつかあげるといいですね。

④ 学校で

授業中に離席したり、外へとび出したりする子に対しては、学校全体がチームを組んでフォローして下さる学校が増え、コーディネーターがしっかりと役割を果たされていることも多くなりました。環境を整えて、前方の掲示はなるべく少なくする配慮や、教室内の整備も進んでいます。先生方の注意喚起やことばの使い方など、子どもたちをよく知ってポイントを押さえて授業されていくすごいなあと思います。しかし、板書の書き方やまとめ方など、子どもたちには分かりにくいだろうと思うこともあって、先生方お一人お一人の指導のやり方に差が大きいことも事実です。

でも、子どもたちの前で先生の悪口を言うのはやめたいですね。お母さんのことばは子どもたちの心に決して良い影響を与えないし、ますます担任のことばに反発していくということもおこりがちです。

ところで、あなたのお子さんは、どういったことで困っていると思いますか？

学校では、多動な子や衝動性のある子は、一斉授業

の中で他の子に迷惑をかけるし、目立つので、先生方はその対応に苦慮されます。自閉スペクトラム症の子はまず友だちとのトラブルはおこしませんし、受動タイプの場合、緊張すると固まるとか極度の人見知りという見方をされて、大して問題にされないことが多いものです。お母さん達も「人見知りで場面緘黙です」とか「吃音が出て…」などのとらえをしていうしやることが多いうように思いますが、登校しづりや不登校にならないように心も配っていく必要があります。また、その他にも見えずぎれやすいタイプとして、不注意があります。例えば、お母さんがそばにいて見ていれば、短い間ならいいいな字が書けるし、持ち物を所定の場所にきちんと片づけることもできます。ですから「やればできる子」と思われます。ところが一人でやらせると、周りのことが気になってしまったり集中力がとぎれてしまったり頭の中で別のことを考えていてぼんやりすることもあります。忘れ物や失くし物が多いのもこのタイプの子どもたちです。しゅっちゅ、コロが無いい」と言って大泣きわがわたり、失くしたことを自体に気づいていないこと

もあります。その上、順序だてて物事を遂行していくことは、とても苦手です。例えば、学校の準備するとか、机の中を整理するといったことは、いくつかの課程を経なくてはならないので、困ってしまうのです。しかも、そばに大人がついていればできることもあるので、「できるのにやろうとしない子」というレッテルをはられてしまうことも多いのです。不注意を「症状」の一部としてとらえるか、単なるミスとしてとらえるかで、その後の対応もちがってくるでしょう。

不注意は、ADHDの一部ですが、多動症のように目立つことがないために、見のがされがちで、本人も自分ではきないと思いつ込んでしまうこともあります。成人になっても、いくつかの事を並行的に計画し、実行していくことがむづかしいために、料理や洗たくが順序よく出来ないといったことも起こってくるのです。

では、こういった不注意の子に対して、どんな支援をしていけばいいでしょうか？

低学年の間は、できるだけ、そばにいて、「何をしたらいいかな？」と、本人に気づかせること、そして気

づけたことをほめていくことが必要でしょう。年令が上
がってくるに従って、自己理解を深めていけるように
して、自分の苦手を知って、その対策が自分で立て
られるようになることが大事です。例えばメモをとる
習慣をつけるとか、見直しやチェックする習慣をつ
けるということも必要でしょう。出した物は必ず元の
所へ戻しておく習慣も、くり返し学ばせていってあげ
たいものです。

こういったことは、学校という大きな集団の中では
なかなか身につけません。家庭の中でお母さんと一緒
に考えていきましょう。ADHDは、脳のしくみの問題
であると言われていますから、お子さんの症状によつて
は、医療との連携も必要です。私たちは、ついつい
薬ということを考えがちですが、家庭、医療、教育
が手をつないでいくことが必要であつて、何でも薬にた
よってしまうことでは決してありません。

先日、ある相談を受けました。Ｔさんは、自分の苦手
さをよく知っていて、「私は先生とちがって、いくつものこ
とを並行してやっていくのは無理です。一つ一つしかや

って行けません。そのためにスケジュールをたてたり、
必要な時はメモを取ったりしています。ところが困った
ことに、スケジュールが全て出来なくて、途中で終わら
てしまうことが多く、苛々してしまいます。中途半端
になったことはどうしていったらいいんでしょうか」と。
よく聞いてみると、Ｔさんは一週間のスケジュールをたて
ているのですが、毎日、予定したことができず残ってしま
うわけです。「では、一日のスケジュールにしてみたらどう
でしょうか。その日に残った分は次の日のスケジュールの中
に組み込んでいくという方法もあるのではないですか」と。
ということでも落ち着きました。計画し、実行し、チェッ
クしていくという一連をしていくことのむづかしさなので
う。実はこんなことで困っている人もあるのです。
自分の子が何に困っているのか、是非正しい認識がも
てるようにしていきましょう。

お知らせ

四月からセンター親の会は、オ二月曜日になります。

四月十三日(月)九時三十分からです。

(十月と一月はオ三になります。)